シリーズ 人権 第79回

おばあちゃんとのつながり

私は、子どもの頃からおばあちゃん子だった。両親が共に働いていたため夕食はいつも祖母の手作りで、習い事の送迎や病気のときの看病などもしてくれ、祖母と過ごした時間が今の自分に大きく影響している。祖母の中では私は今でも子どものままであるらしく、両親に「心配が絶えない」と言っているそうだ。

私が子どもの頃、祖母は祖父と共に工場を切り盛りしており、従業員や取引先とのやりとりで、常にせわしなく働いていた。しかし、祖父が亡くなった数年後に祖母は難病を患い、毎週のように病院へ通わなければならなくなり、それまでのような元気な姿は徐々に消え、口数も外出の機会もめっきり減っていった。体力も年々低下していき、自分でこなしていた家事などができなくなっていた。

すると両親は祖母の身の回りの世話が増え、また祖母は自分の思い通りに体が動かないことから、互いにイライラが募り、衝突してけんかをすることもあった。

ただ、そんな時でも祖母は私の話は素直に聞いてくれた。祖母の元気だった頃の姿が鮮明に記憶に残っていた私は、祖母に家族以外とのコミュニケーションの機会があれば、少しでも元気な姿を取り戻せるのではないかと考えていた。

そんなある日、祖母が主治医からデイサービスの利用を勧められたと私に相談してきた。これは家族以外との社会的な「つながり」が持てる絶好の機会かもしれないと思い、私は利用を勧めた。祖母は、新たな人間関係をつくることや外出することに対する不安などから悩んでいたが、数日後「いっぺん行ってみるわ」と返事をくれた。

始めてデイサービスを利用した日に、感想を聞くと表情がぱっと明るくなり、とても多弁になったことに非常に驚いた。多少疲れたそうだが、それ以上に家族以外との「つながり」ができたことに喜びを感じたようであった。その後も日ごとに会った人との会話やその日にあったことなどを楽しげに話してくれる姿を見て、元気だったときの祖母の姿を垣間見たようで、少しほっとしてうれしかったのを覚えている。

そんな生き生きとした祖母の姿は、私たち家族が「元気がなくなっていく祖母のことをどのように見ていたのか」また「祖母の思いを知ろうとしていたのか」と祖母との関わりを見つめ直すきっかけとなった。家族だからといって、互いのことを分かったつもりになっているだけだったのではないだろうか。

親、子、孫などの立場に関係なく、お互いを深く理解し尊重し合うことが大切で、そうすることで人として尊厳を持ちながら生きていくことにつながるのではないかということに気付くことができた。

祖母にとって、私がいつまでも子どものままである限り、私はおばあちゃん子であり続けようと思う。私にとって祖母はかけがえのない存在であり、これからも長生きしてほしいと心から願っている。

(30代・男性)